



見沼たんぼくらのイベント

平成29年度見沼たんぼくら総会を開催

平成29年4月22日(土)、市民の森・見沼グリーンセンターにおいて、会員・来賓合わせて29名出席のもと「平成29年度総会」を開催しました。

冒頭の挨拶で、新井一裕会長は、「今の時代、団体や組織に属する人は減っているものの、東日本震災以後、ボランティアをする人は増えている。ボランティアの心の芽生えを糸口に、皆で声をかけて会員の増加に繋げていければ・・・」と、会員数の減少傾向に歯止めをかけた思いを語りました。

また、来賓として当くらぶ顧問である埼玉県土地水政策課長の代理で、小野寺智子主幹並びに村田圭一主査をお迎えし、小野寺主幹からはご挨拶を頂戴しました。



議事では、平成28年度事業報告・収支決算報告・監査報告が承認された後、平成29年度事業計画・予算案が可決され新年度がスタートしました。総会終了後には「第69回自然観察ハイキング 見沼の自然と史跡を訪ねて」が開催され、市民の森周辺の散策が行われました。(根岸 稔記)

菜の花栽培と園児の花つみ

4月14日(金)晴天の下、こぐま保育園の園児達による菜の花つみが緑区見沼の畑で行われました。

参加者は3歳、4歳、5歳の園児48名、先生8名、見沼たんぼくら役員9名の総勢65名。当日の菜の花畑はまだ満開の桜と黄色い菜の花とのコントラストが美しく素晴らしい景観をつくっておりました。今年は桜の見ごろが長く菜の花との共演は2週間ほど楽しめました。

子供たちは菜の花畑を嬉々としてはしゃぎ周りながら、年長の子らはハサミを上手に使い花を切り取り、他の子らは先生と一緒に丁寧に花をつんでおりました。10時頃から小一時間楽しんだ後、リュックに一杯の花をつめて「おかあさん、おとうさんにあげるんだ」などと言いながら歩いて保育園に帰りました。

子供たちが大人になった時に見沼たんぼで花をつんで遊んだ記憶が残ってくれることを期待して、これからも菜の花栽培を続けて参ります。(三上 雅央記)



見沼たんぼくらのイベント

第68回見沼の自然と史跡を訪ねて

圓蔵院のシダレザクラと中山神社へ

3月25日(土)9時、さいたま新都心駅に会員26名と会員外32名合わせて58名が集合。樹齢300年余のケヤキがそびえる新都心東広場で始めの集いを行い、見沼代用水西縁を越えて上山口新田に向かった。

田圃の畦道で春の七草のコオニタビラコの群生地に出会い、歓声が上がった。そこは無農薬の田圃の証しなのだ。

低地から東側の大宮台地に上がり、圓蔵院の庭園を見て回った。ツバキ・ハクモクレン・ミツマタ・キブシ・シダレザクラの花木が競って美しい花を咲かせていた。

なかでも、さいたま市天然記念物のシダレザクラは、しなやかな枝が垂れ下がり美しい花傘を飾って、誰もが足を止めて観賞した。



▲ 圓蔵院のシダレザクラ

それから、ゴールの中山神社を参拝した。境内林は常緑樹が多い。シラカシとアカガシとウラジロガシ、サカキとヒサカキ、ヒノキとサワラ、それぞれ同属の樹木を比べて観察し、人の暮らしとの関わりについても学んでいただいた。

材質が白いシラカシ(白樫)と材質が赤味をおびたアカガシ(赤樫)は、何れも堅いので、農機具や木刀に使われる。(小野 達二記)

第69回見沼の自然と史跡を訪ねて

春の七草とサトザクラ

4月22日(土)13時~16時、北区の市民の森正門集合、解散で、見沼たんぼ北西部を見て回った。参加者は、会員35名と会員外6名、合わせて41名だった。

見沼代用水西縁の左岸から右岸を北上し、お伊勢様の神明社を参拝した。氏子さんの清掃が行き届き、野草の姿も見えず寂しかった。

隣接の見沼公園に入ると、サトザクラの仲間のウコンとカンザン(ヤエザクラ)が花盛りで、その美しさに魅了された。



▲ 見沼公園のカンザン

そこから、見沼グリーンセンター附属農園の北側の防風林にはいった。主体は大型のシイノミが出来るマテバシイだった。林床には白い花でトゲのある小低木が広がっていた。クサイチゴだった。

この後、芝川左岸を下って、鷺山橋から大宮台地に登り、鷺神社を参拝し、境内林の樹木を観察した。

それから、見沼2丁目の田圃に降りて、春の七草はじめ湿地や原っぱの野の花を観察した。

サギの飛ぶ姿をイメージさせるムラサキサギゴケを後に、出発地の市民の森に帰着した。

(小野 達二記)

見沼たんぼくらぶイベント

第70回見沼の自然と史跡を訪ねて

ノアザミはじめ春の花を楽しむ

「第70回見沼の自然と史跡を訪ねて」は5月21日(土)9:30見沼自然公園集合で開催された。好天に恵まれたが、30℃を越える夏日との天気予報により、熱中症や紫外線の心配もあったのか、参加者は24名と少な目で3班編成で実施された。



確かに日差しは強かったが、新緑を吹き抜ける程良い風がありまずは観察日和と言えよう。木陰下の集会の後、各班別に出発する。参加者の中にはこの地域が初めての方もおり、江戸中期の吉宗将軍の頃、見沼を干拓し1200町歩の水田を造成した井澤弥惣兵衛像を表敬する。

銅像南東側の修景池にはスイレンが、また岸辺に外来種のキショウブが多く咲いている。足元に絶滅危惧種のカワジシャの一群が観られた。当班はハンカチノキを見るため池の北側を廻ることにする。同樹木の白い苞は既に落下して実(果実)を確認する。シナノキ・メグスリノキ・イロハモミジなども観察する。自然観察園を通り見沼代用水東縁(開拓された見沼の用水の代わりに利根川からの流水を見沼たんぼに供給—以下東縁)の右岸に出る。土手には背の高いイネ科植物がびっしりと生えている。水田には既に田植えが終えた所もあり一面水がはられている。農道脇の水路にはサトイモ科のショウブがあり、先程見たキショウブ(アヤメ科)に葉は似ているが花は全く異なっている。類似の名称でも科が異なる種があることである。流量の多い東縁に架かる上野田橋を渡る。深井家長屋門に向かうが、途中でバイカウツギ・クリの花を見る。又、道端には穂を付けたコバンソウもある。深井家長屋門はさいたま市指定有形文化財で、茅葺寄棟造で弘化元(1844)年の建立である。上野田村の天領分の名主役の格式を備えた堂々たる構えである。茅葺屋根には透明な糸が張

り巡らされカラス対策がされている。

更に農道を進むと、道脇に柿木の並木がある。これは渋柿で、江戸時代柿渋の供給地であったことを示すものである。

さぎ山記念公園を経て再び見沼自然公園東側に戻り、東縁に沿って加田屋新田に向かう。東縁右岸一帯は水田が広がる地域である。この地区に管理する水田がある当会会員の「NPO 法人見沼ファーム21」は5月末の日曜日に多くの人達が集まり田植えを実施する予定であるという。

東縁右岸の土手は本日のテーマであるノアザミの生えている場所で、今年は多くの美しい花を咲かせている。その他、コウゾリナ・シラン・ナヨクサフジ・ナンテンハギ、更にはノイバラの花も咲き揃い多くの参加者がカメラを向ける。



加田屋新田の中央を流れる加田屋川に架かる山下橋を渡り右岸に出る。アカバナユウゲショウやマメグンバイナズナの花々が迎えてくれる。更に川岸のフェンスの処にはカキネガラ□が列をなして生え、川にはヨシやマコモが茂っている。休耕田周辺にはヤセウツボがアカツメクサに寄生して生えている群れがある。アゼナルコやミコシガヤも生えている。三崎町バス停近くで、顔の位置に丁度スタジイの花を付けた枝にも出会う。

やがて、旧坂東家住宅見沼くらしっく館に到着する。この建物は加田屋新田を開発した坂東家の旧住宅をほぼ同位置に復元した木造平屋・寄棟造・茅葺の建物である。安政4(1857)年に建築されたさいたま市指定有形文化財である。なお、享保13(1728)年見沼代用水の完成に合わせて開かれた田は坂東家の屋号「加田屋」をとり加田屋新田と名付けられている。約3時間を要した本自然観察会は参加者の協力を得て無事終了となる。ご苦労様でした。(若野 忠男記)

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

新大道橋から新都心を望む

絵と解説 八木一郎



首都高速埼玉新都心線の終点となる新大道橋の歩道上から、芝川・大道西橋を介してさいたま新都心を遠望。建物は左から関東郵政局、関東地方整備局・関東農政局、関東財務局などの合同庁舎、NTTなど企業のビル街に続いて、「さいたまスーパーアリーナ」の建物が並ぶ。スケッチ当日は風の強い一日だったが、右方に秩父連山左方に積雪の富士山がクッキリと見られた。

北宿大橋(さいたま市緑区新宿)

北宿大橋はさいたま市立病院の北を流れる芝川に架かる橋で、現在の形に改修されたのは平成2年(1990)2月。遠景の新都心や中景の上新宿橋・芝川などを美しいデザインの構造を通して観られるのは、北宿大橋の大きな魅力である。



さぎ山記念公園(さいたま市緑区 南部領辻)

徳川時代からさぎの繁殖地として有名だった「野田のさぎ山」を記念して造られた公園で、集団で営巣していた時代を知りうる資料室が整備されている。

敷地内には釣り糸を垂れる人々が多く見られる池があり、また自炊やキャンプを体験できる青少年野外活動施設も整備されている。

見沼たんぼくらぶ会員作品展

「注連 八丁メ(シメナワ・ハッチョウジメ)」

作者 小高智子

かまどの神様である荒神様が祀られている加田屋新田の旧坂東家のかまどにある注連縄は八丁メといわれています。毎年地元の熊野神社で受けた、八枚の紙垂(シデ)を藁に挟み、かまどの上に掛けます。手前に順に下げてゆくので後ろ側の注連縄はすすけてもろく黒くなっています。内側の新しい縄は東日本大震災の後、万一の火災を避けるため囲炉裏の火を用いなくなったことが影響しているようです。ガッシュ絵具を上重ねてみましたが、黄色の表現に苦しみました。



見沼たんぼ探訪記

芝川の流れと春の花

4月の中旬、「市民の森」に行く。直ぐ近くには芝川の流れがあるが、桶川市北1丁目地内に水源を有する1級河川であり、国道17号線の東側を南下し、さらに見沼たんぼを南下しながら加田屋川を合流、川口市領家地内で荒川へ流れ入っている。丁度、見沼たんぼを南北に縦断する流れであり、江戸時代から見沼たんぼの排水路としても利用され、重要な役割を担ってきた川である。

川の堤を歩くと、川の流れの中には枯れたヨシが目につくが、兩岸には菜の花が咲き競い、遙か先まで黄色一色に覆い尽くされ、春の陽を受けて実にまぶしい。その遙か向こうには新都心の高層ビル群が幾つも建ち、春霞のなかにボーッと霞んで見える。このビル群と言えば、JRの鉄道操車場跡地などを整備して平成15年(2003)3月、土地区画整備事業を完了し5月には街開きを行ったビル群だ。



反対方向に目を向けると、市民の森の駐車場に沿って植えた幾本もの桜が、満開期を迎えて長い帯になって見える。薄いピンクの色合いの帯で春の柔らかさが見るほどに伝わって来る。樹に蓄えた在りたけの全エネルギーを振り絞って咲き広がる桜花は、春本番を迎えた花と言えよう。

あちらの方では麦わら帽子の農家のご夫婦が、鋤を使って畝作りをしている。時々、体の動きを止めては手の先を握りこぶしにして腰の辺りを叩いている。「アア疲れた・・・」とでも言っているようであるが、農作業を進めながら桜花や菜の花を楽しんでいるかのようにも伺え、のどかな春の訪れを感じさせてくれる。(召田 紀雄記)

林床の希少植物<見沼たんぼ地域>

かつて農家の暮らしを支えてきた雑木林や屋敷林は経済的メリットを失い、開発の標的とされた。残された森の多くは、森としての機能を失った。手入れが放棄され樹木が著しく密集して日光が林床にまったく届かない状況になったり、或いは著しく間伐され常に日光が林床を照らす疎林となった。

それで、林床の希少植物が姿を消した。

こうした状態から、雑木林などを環境保全林として再生する取組が自然保護団体によってなされている。木漏れ日が林床に届く程度の森づくりだ。こうして、埼玉絶滅危惧種の林床植物が次々と自然復元している。

* 林床で見られる埼玉絶滅危惧種

アマナ、イカリソウ、ウラシマソウ、エビネ、カタクリ、キンラン、ギンラン、クマガイソウ、サイハイラン、シュンラン、ヤマブキソウ、ワニグチソウ

* 林床で見られる大宮台地注目種

アキカラマツ、アマドコロ、オオハナワラビ、カシワバハグマ、キチジョウソウ、コバギボウシ、チゴユリ、ツリガネニンジン、ナルコユリ、フタリシズカ、フユノハナワラビ、ホウチャクソウ、ヤマユリ

* 主要な定例保全活動地

さいたま市みどり愛護会：北区一土呂自然の森、見沼区一大和田2丁目緑地、大和田1丁目特別緑地保全地区、大和田緑地公園特別緑地保全地区、南中丸緑地公園、春里自然の森、緑区一大牧自然緑地

浦和西高斜面林友の会：浦和区一西高斜面林
さいたま緑のトラスト協会：緑区一さいたま緑のトラスト1号地

(小野 達二記)

見沼たんぼの仲間たちNo.42

南部領辻ボランティア水田友の会

厚澤 正栄

南部領辻ボランティア水田友の会は、見沼たんぼにおいて耕作放棄水田の増加を背景に、見沼たんぼの保全・活用のために実施された埼玉県の公有地化推進事業の一つとして、平成12年に埼玉県より委託を受けて、見沼たんぼを活用した米作りの管理指導を始めました。

活動の内容は、県民の皆さんに米作りを体験して頂くもので、管理指導は、地元の農業・米作りの経験のある仲間たちが行っています。

4月に体験者募集を行います。毎年150名以上の応募があり、見沼たんぼで多くの方の出会いがあります。

6月の田植えでは、苗の持ち方、植え方を説明し、たんぼに入る時の注意をしてから作業に掛かってもらいます。初めて水田に入る方や子供たちの中には水田に入るのをためらう方もいますが、直ぐに慣れて皆で横一列になり、真剣に植え始め



ます。そのうち泥んこになり、はしゃぎ始めて賑やかになり、田植えが終わる頃には皆さんが楽しそうにしていました。泥だらけになったお子さんの体を、「これも初めての体験だ・・・」と言いながら、見沼用水から引いている冷たい堀の水で洗い流していたお母さん方の笑顔は印象的で、これも見沼たんぼの自然の姿なのかなと思いました。

田植えから収穫までの間に草取り作業を7月、8月、9月と3回行っていきます。暑い中、汗を流しながらの作業ですが、冷たい水の中の土に触れる感触が良かったという方もいました。また、草取りの合間にイナゴの幼虫を見つけたり、ザリガニを取ったりしながら楽しそうに草取りをする子供たちの姿は印象的でした。

10月の稲刈りでは、刃物である鎌を使うので、まず鎌の持ち歩きについて注意します。その後、鎌の持ち方、稲の刈り方の指導をしてから稲刈り作業の開始です。黄金色に実った稲を鎌で刈取り、刈り取った稲を藁で束ねて、天日乾しをするために竹で作ったノロシの所まで持ち運んで稲掛けをして一連の稲刈り作業は終了となります。足元



の悪いたんぼの中で稲を運び出す作業は大変な事ですが、子供たちは楽しそうに作業をしていました。

11月の収穫祭では、里芋の皮取り、カマドの用意など、朝から皆で料理の用意をします。子供たちも慣れない手つきで里芋を剥いていました。

薪を燃料にしたカマド炊きのご飯と芋汁が出来上がったなら、収穫祭の始まりです。最初に福祉団体等に収穫米の寄贈式を行い、その後、ご飯と芋汁等々で会食します。自分たちで作ったお米の味は格別な様で皆さんが美味しそうに食していました。また、田植えから稲刈りまでの思い出を話題に会食中の会話も尽きません。

収穫祭の最後に、収穫したお米を参加者の皆さんに分配して1年の活動は終了します。

見沼たんぼを支える農家さん

「紅赤」の松沢英夫さん

「紅赤」というサツマイモをご存知ですか。明治時代、さいたま市発祥。甘くておいしいと、一時は県内のサツマイモ栽培面積の9割を占めるほどでしたが、栽培が難しく収穫量も少ないため、戦後「ベニアズマ」が開発されると生産が激減。しかし近年、伝統野菜として復活、市内では「さいたま市紅赤研究会」が中心となり栽培に取り組んでいます。

その研究会のメンバーの松沢英夫さん。農業高校を卒業してから40年ほどは、ずっと植木一筋で栽培してきました。市内のあちこち、例えば自治医大や天沼中央通りのハナミズキ、氷川神社の裏参道の桜、グリーンセンター内などにも松沢さんの育てた木々が植えられています。当初は初々しい若木だったものが、10年、20年と年月を重ねて堂々と育っていく。

そんな木の話がされる時の松沢さんの眼差しは、子供の成長を見守る親のよう。中川のご自宅の植栽も見事で、今年は見沼区のオープンガーデンにも参加されたそうです。旧大宮市の「花いっぱい



(ハウス内の紅赤の苗)

運動」の副会長も務めました。野菜に転換したのは、年齢を重ねるにつれ大きな植木を扱うのが体力的にきつくなったことや時期を同じくして、植木の需要が減ってきたからだそうです。そんな折、木崎の直売所の植栽を手掛けた時に、「野菜もやったら・・・」と声をかけられ野菜の栽培を始めました。そして最初に勧められて作ったのが「紅赤」でした。実は「紅赤」を世に広めた吉岡三喜蔵さ

んという方は、松沢さんの母方のおじいさんだそうです。

今は自宅周辺の一町歩ほどの畑で、奥様の清子さんと二人で年間30種類もの野菜を育てています。ネギ、トマト、ナス、枝豆、芋類などのおなじみの野菜はもちろんですが、ケールやカリフラワーなど新顔の野菜も積極的に栽培しています。畑はたんぼより手がかかるとよく言われますが、きれいに手入れされた広々とした畑を見ると、「朝は明るくなれば仕事を始めるよ」とさりげなく話された意味がよく解りました。収穫した野菜はほとんどを木崎の直売所で販売しています。

「さいたま」というこの都市の中で農業をやっていくには、直売しか生きる道はない、と松沢さんは言います。広い農地で大規模に展開する農業



(ケールを手にする松沢さん)

と価格で競争するのではなく、消費地をすぐそばに抱えた地の利を活かして、採れたての様々な農産物を提供する。そのためには、例えば新都心から続く様々な公園に直売所があればいいのに、というお話に思わず頷いてしまいました。

清子さんのお勧めは紅赤の天ぷら。厚切りでも焦げずにきれいに揚がるそうです。秋になったらぜひ試してみてください！

取材：島田由美子・高橋いずみ

文責：高橋いずみ

JA さいたま木崎ぐるめ米ランド

浦和区領家4-24-16、Tel：048-834-2890
年中無休（年末年始を除く）

営業時間 10～18時（11～3月は10～17時半）

見沼たんぼくらのイベント案内

秋野菜栽培

2号地（緑区大字見沼484）

- ① 9月 2日（土）種蒔き
（雨天の場合は、9日（土））
 - ② 9月23日（土）除草、間引き
 - ③ 10月 7日（土）除草、間引き、収穫
 - ④ 10月28日（土）除草、間引き、収穫
 - ⑤ 11月11日（土）収穫
- 10時～12時（9時30分より受付）

第2回以降は雨天順延

申込み：7月15日まで事務局へFAX・葉書・メールなどで、住所・氏名・電話番号・年齢を明示（同居の家族同伴歓迎、氏名・年齢併記）

*会員外は埼玉県土地水政策課に申込み

*応募多数の場合は抽選

京芋・里芋・八つ頭・生姜栽培

1号地（緑区大字見沼610及び613）

- ⑤ 7月13日（木） ⑥ 8月3日（木）
- 8時～11時頃（7時30分より受付）
- *会員限定申込制、福祉施設へ寄贈

見沼塾『見沼たんぼの昆虫観察』

7月9日（日）9時30分・大宮第二公園

南側の管理棟集合 講師：牧林 功 氏

申込み：当日、集合地で9時から受付

交通：大宮駅東口からバス⑧「芝川」下車、北側約10分乗車

見沼の自然と史跡を訪ねて

『ヒガンバナはじめ秋の花を楽しむ』

9月30日（土）9時30分・見沼自然公園

申込み：当日、集合地で9時から受付

交通：大宮駅東口からバス⑦「締切橋」下車、南側

浦和学院高校・浦和美園駅・さいたま東営業所・浦和東高校各行き、約30分乗車

見沼たんぼくらぶ入会を勧めます

見沼たんぼをもっと知りたい

見沼たんぼの自然にふれてみたい

見沼たんぼで何かしたい

見沼たんぼの保全に協力したい

そんな皆さまをお待ちしています！

■ 季刊『みぬま通信』を郵送します。

4月・7月・10月・1月発行

■ 埼玉県土地水政策課の支援のもと、見沼たんぼ地域の里やまで、様々な体験事業を展開しています。子どもから年寄まで気軽に楽しめるイベントです。

○…見沼ふれあい農園づくり

農地はスタッフが耕運し、畝づくりを済ませ、種蒔き・植付から除草、収穫までの作業です。

「京芋・里芋・八つ頭栽培」や「秋野菜栽培」などを楽しみ、福祉施設にも寄贈しています。

○…自然観察ハイキング

自然観察指導員のガイドで、年4回、史跡を巡りながら花や鳥など見て回ります。

○…見沼たんぼ清掃ボランティア

○…斜面林の体験学習

○…見沼塾—見沼の自然や文化を学ぶ講座

■ 年会費 個人（同居の家族単位）・団体・企業とも1口¥1,000（団体・企業は3口以上）

みぬま通信第71号

発行日 平成29年月7月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町

1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2017 Minuma Tuusin